

OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



現地女性(母世代)との
社交ダンス初挑戦の図

プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 生垣 賢 (Ken Ikigaki)
所属 (School) 工学研究科 マテリアル工学課程
学年 (Grade) 大学院 2年

留学先 (Name of overseas institution)
オーストラリア・アデレード大学
留学期間 (study abroad period)
2017/6/2~2017/8/18

記入日 (Date) 2017/8/24

留学レポート Study Abroad Report

本レポートでは私の留学体験及びその成果、また現在留学を検討している学生の方へのアドバイス等を記述させていただきます。私は大阪府立大学の留学支援制度と、所属する研究室からの援助を受けて、オーストラリアのアデレード大学へ2か月間滞在しました。私としては人生初の海外での長期滞在であったこともあり、留学中は日々刺激的で貴重な経験をした2か月でした。

留学に至った経緯

私は現在本学の大学院・工学研究科に所属し、材料化学に関する研究活動を行っています。留学のきっかけは2年前の夏、研究室に訪れた共同研究先の外国人留学生(Andrew)との出会いまで遡ります。当時学部4年生だった私にとってAndrewは初めて密に関わった外国人でした。Andrewが私の所属する研究室に滞在した目的は、新しい研究テーマでの共同研究をスタートさせる事でしたが、配属されたばかりの私は研究で深く関わることが難しく、テーマの担当をしていた先輩を手伝いながら、Andrewの日常生活を手助けするので精一杯でした。2年後には自分がAndrewの通うアデレード大学へ留学するとは当時思いもしていませんでしたが、拙い英語を恥じらいながらも駆使し、彼と交友関係を築けたことは、私の海外生活への憧れをより強いものにし、指導教授から頂いた、アデレード大学での短期研究留学の提案に迷わず飛び込む後押しになったと感じています。

渡航前の準備

つばさ基金による留学支援が決まると同時に準備を始めました。私の場合は支援の採択から渡航開始まで日数があまりなく、個人的に下宿先の引っ越しも重なったため、渡航日まではかなりばたばたしていました。オーストラリアは簡単なVISAの申請が事前に必要(自分で公式サイトから申請をすると2000円かかりますが、代行会社を選ぶと600円程度なので注意)であったり、海外保険への加入・奨学金関係や大学への留学届・現地の指導教授からの受け入れ承諾書など、なかなか自分のテンポだけではスムーズにいかない事務処理が存在するので事前に調べ、計画的にこなしましょう。私は個人的にAndrewへも連絡をし、フライトの時間に合わせて空港へ迎えに来てもらう事で、現地での負担を軽減してもらいました。軽装で降り立った冬のアデレードは思いのほか冬で、すんなりと車で宿まで送ってもらえたのはかなり心強かったです。(写真①)

現地での日常生活

アデレードは語学学校から大学まで、多くの学校が存在しているらしく、現地では海外留学生用の民間学生寮に滞在していました。寮には日本人以外のアジア人が非常に多く、それぞれの個室と共用のバス・トイレ・キッチンで生活を送っていました。夕飯時になるとキッチンから自ずと多国籍な匂いが発生し、各自が自国の料理のポイントを



写真①

説明してくれました。ベトナム人と思われたのか、「お前の作っているそれはベトナム料理か？」と聞かれたりしたこともありましたが。寮自体の外観は綺麗な雰囲気があり(写真②)、部屋も綺麗で申し分なかったのですが、共用バス・トイレだけは日本人の中でも綺麗な私には抵抗がありました。それらも全ては経験と思い、「豪に入っては豪に従え」と自分に言い聞かせて過ごすと、1カ月たつ頃には全く気にならず、快適に過ごすことが出来ました。



写真②

平日は朝から毎日大学へバスで通学し(あちらのバスは次のバス停を教えてくれないので慣れるまでは Google マップと睨めっこです)、夕方には研究室を出て寮へ帰る生活をしました。現地の研究室の雰囲気は日本と大きく異なり、良くも悪くも学生は研究室では研究だけに専念しているのが印象的でした。掃除やごみの廃棄、実験に使用する試薬の発注など、様々な雑務は大学側の雇い手が一括でやってくれるため、朝来て実験し、夕方には家に帰って恋人や家族と晩御飯を食べる、ライフワークバランスが学生のうちから確立できる環境が整っているのだな、と感じました。

食事に関しては、お昼ご飯を大学周辺で現地学生と食べに行く以外は寮で自炊をしていました。毎日スーパーに通って冷蔵庫の残りを考慮しながら買い物する生活は、一般的な海外旅行ではまずしないので、現地で実際に生活を営む実感を得ることが出来ました。オージービーフは日本でもお手ごろな価格で手に入りますが、オーストラリアでは更に安く、鶏肉と同じ値段で手に入れることができます。味もよく、週3の頻度でステーキを焼いて食べていました。牛に飽きると変わり種としてカンガルーの肉を焼いたりもしました。(写真③)



写真③

現地での研究活動

滞在中の研究室は、私が日本で研究している材料だけを専門に研究している教授が指揮を執っている環境でした。そのため、所属している学生も全員自分と同じ材料系を扱っており、毎週末行われるラボミーティングでの報告内容や博士課程の学生によるプレゼンの内容は全て自分の研究と繋げて考えることが容易にできる点において刺激的でした。同時に、自分が扱う材料系への知識の浅さと研究の幅の狭さに気付くことも出来ました。彼らと共に2カ月間もの期間研究活動を行うことで、様々な実験手法・指針を学ぶことができ、今後、私の研究を豊かにする経験であったと感じています。

現地でのコミュニケーション

ご存知の通りオーストラリアは英語を母国語とする国です。私は英語に関してそれほど自信がなく、事前に聞いていた情報で、「オージーの英語は早くて聞き取りづらい」と知っていたので覚悟はしていましたが、最初の1カ月は本当に分からず苦戦しました。自分の成長の無さに日々悩んでいましたが、ある時自然と聞き取れているような気がしました。それは英語力が向上したわけではなく、単純に慣れただけで、心穏やかに聞くことができるようになったのだと思います。すると会話時に緊張がなくなり、知らない単語がでてきたり、内容が分からなかったりすると何食わぬ顔で聞き返すことができるようになりました。そこで私は、英語のコミュニケーションにおいて、英語力は二の次であり、まずは日本語で聞き取れなかった場合や、知らない単語がでてきた場合と同じように、当たり前聞き返す事が第一歩であると気づきました。それも、相手に変に気を遣わず、対等な立場で堂々と「分からない。」と言う事が大事であると思います。調子に乗った私は、研究室でよく話をしていた学生に最終的には「お前の英語が速いのが悪い、聞き取りやすく喋れ。」と説教する始末でした。会話をする意思を見せれば向こうも合わせてくれるので、どんどん挨拶と共に話し掛けるようになりました。

留学を検討している学生へのアドバイス

私は偉そうな事を言える身ではありませんが、「英語力の向上」や「貴重な人生経験」などの崇高な志など関係なく、興味があるなら一旦行ってみればいいと思います。大阪府立大学は、前向きに動く学生の努力に見合った支援をしてくれる素晴らしい大学だと思います。留学で直接的に英語力が向上しなくても、留学をきっかけに英語の勉強意欲が格段に強くなるのも短期留学の立派な成果であると思います。まずは目の前の事への努力を怠らず、巡ってきたチャンスには迷うことなく飛び込んでみてください。